

貴司山治「日記」一九三四年（昭和九年）（一）

浦西和彦

110

昭和六年九月十八日、関東軍参謀ら、満州占領を企てて奉天郊外柳条溝の満鉄線路を爆破した。関東軍司令官本庄繁は、これを中国軍の所為として総攻撃を命令し、満州事変がはじまった。その二カ月後、すなわち、昭和六年十一月二十七に、正式の結成大会を開催することなく、極秘裡に左記の諸団体の連合体として、日本プロレタリア文化聯盟（略称コップ）が結成された。

日本プロレタリア作家同盟（略称ナルブ）

日本プロレタリア演劇同盟（略称プロット）

日本プロレタリア美術家同盟（略称ヤップ）

日本プロレタリア音楽家同盟（略称P・M）

日本プロレタリア映画同盟（略称プロキノ）

日本プロレタリア写真家同盟（略称プロフォト）

日本プロレタリア科学研究所（のち科学者同盟、略称プロ科）

新興教育研究所（略称新教）

日本戦闘的無神論者同盟（略称戦無）

日本プロレタリア・エスペランチスト同盟（略称ボエウ）

無産者産児制限同盟（略称プロBC）

やや遅れてプロレタリア図書館も参加した。

コップは、機関誌として『プロレタリア文化』を昭和六年十二月に創刊し、大衆的啓蒙雑誌『大衆の友』、『働く婦人』を昭和七年一月に発刊した。さらに朝鮮語の雑誌『ウリトナム』を昭和七年九月に出し、戦争とファッショ化に急傾斜しつつある状況下で活動を展開していった。コップは前記の各団体から選出された中央協議会を最高機関とし、そのもとに書記局、各種協議会、各種編集局、出版所、資料部を設けていた。山田清三郎著『プロレタリア文化の青春像』（昭和58年2月15日発行、新日本出版社）によると、コップ創立当初のその顔ぶれは、次のごとくであった。

中央協議会職員

中野重治・壺井繁治・宮本百合子・小林多喜二（以上ナルプ）

村山知義・小野宮吉・土方与志（以上プロット）

岡本唐貴・大月源二（以上ヤップ）

佐々元十・岩崎昶（以上プロキノ）

貴司山治・土井栄二（以上プロフォト）

福田上一・山本正夫（以上P・M）

寺島一夫・風早八十二・小川信一（以上プロ科）

武藤丸楠・牧島五郎（以上ポエウ）

永田広志・佐野袈袈美・石川涌（以上無戦無）

山下徳治・田部久（以上新教）

小林琴子・中根孝之助（以上プロBC）

書記局

小川信一（長）・牧島五郎・小野宮吉・窪川鶴次郎・磯野駿・長尾

正良・大森詮夫

各種協議会議長

婦人・宮本百合子 少年・山下徳治 青年・牧島五郎 農民・黒島

伝治

編集局

機関誌・寺島一夫 大衆雑誌・中野重治 グラフ・大月源二

出版所・壺井繁治（長）・山内謙吾・戸台俊一・長尾正良

資料部・武藤丸楠（長）

日本共産党は、昭和三年の三・一五事件、続いて翌年の四・一六事件の全国的一斉検挙によって、中央部員以下その大部分の人達が逮捕され、「僅二、東京地方委員会第三地区及京浜地方二一部組織ノ残存セルノミトナレリ」（内務省警保局編『社会運動の状況2昭和五年』）といった有様であった。戦前の非合法日本共産党の歴史は、全国的一斉検挙により、党組織が崩壊し、それを少数の人達によって再び党を再建するといったことの繰り返しであった。四・一六事件以後も、田中清玄、佐野博、前納善四郎らが連絡をとり、中央委員会を組織したが、昭和五年二月二十四日に日本共産党への大検挙がなされた。同年七月十四日には中央委員会の田中清玄が検挙される。そして、昭和六年一月に、破壊された党組織を風聞丈吉、岩田義道、紺野与次郎らが再建するのである。

昭和五年八月十五日から三十日まで、プロフィンテリン第五回大会がソビエトで開催され、日本代表团（紺野与次郎）の通訳として参加していた蔵原惟人が、日本共産党中央部検挙の報を受け、予定を変更して、昭和六年二月、ひそかに帰国した。そして、蔵原惟人は古川莊一郎の筆名で「プロレタリア芸術運動の組織問題——工場・農村を基礎にしてその再組織の必要——」を執筆したのである。

蔵原惟人は党中央部の宮川寅雄らと連絡をとり、コップの結成に指導的役割りを果たす。コップは再三再四破壊され、脆弱になっているため、コップはたちまちねらい打ちに弾圧されていく。

昭和七年三月二十四日、小椋広勝、平田良衛、寺島一夫、小川信一、窪川鶴次郎、壺井繁治、小野宮吉、牧島五郎らが検挙され、コップ大弾圧が始まる。四月には蔵原惟人、中野重治、生江健次、村山知義、宮本百合子らが、五月には橋本英吉らが、六月には秋田雨雀、貴司山治、細田源吉、細田民樹、藤森成吉、伊藤信吉、金竜斎、松山文雄、須山計一らが検挙されたのである。六月末までに四百人もが検挙され、長い拘留のちに昭和九年までにコップ関係者だけで七十余名が起訴されるにいたった。だが、大弾圧をのがれて地下活動にうつた宮本頭治、小林多喜二、杉本良吉、手塚英孝らのひとと、起訴にならずに済んだひとらとでコップの運動は昭和九年春まで続けられる。しかし、四月以降の運動は、活動的な中心人物の大多数が逮捕され、事務所もたびたび搜索され、刊行物は殆んど発売禁止となるという状態で、極めて困難になっていった。地下に潜った小林多喜二は昭和八年二月二十日、連絡中を赤坂で今村恒夫とともに逮捕され、築地署で警視庁特高小川、山口、須田らの拷問で虐殺され、その十一月二十六日に宮本頭治も捕えられる。昭和八年末

には、日本プロレタリア音楽家同盟・日本プロレタリア映画同盟・日本プロレタリア写真家同盟らの各芸術団体は無活動状態になり、自然解体になっていた。活動を続けているのは、コップ中央部と日本プロレタリア作家同盟、プロレタリア科学研究所だけで、ほとんどのプロレタリア文化団体が活動を停止し、自然消滅していたのである。翌九年二月二十二日、日本プロレタリア作家同盟も第三回拡大中央委員会で、ついに解散声明をし、同五月には、コップ中央部もプロレタリア科学研究所も最後の刊行物を出してその直後に消滅した。

貴司山治の昭和九年の日記は、こうしたコップ・ナルプの活動形態が解体の危機にひんしていた時期のことが書かれているだけに大変興味深い。プロレタリア文化運動の極めて貴重な資料のひとつになるであろう。

貴司山治は昭和九年一月三十日に検挙され、五十六日間も長い間、杉並警察署に拘留された。杉並警察署で転向の手記を書き、そのことを新聞に公表することを条件にして、三月二十六日に釈放されたのである。昭和九年の日記は釈放された三月二十六日から書かれ、十二月九日で終わっている。紙幅の都合で、今回は三月二十六日の一日分をここに紹介する。この一日分の日記は四百詰原稿用紙で八十三枚もある。五十六日間も拘留され、釈放で自由になった日に、そ

の時の様々な想念を一気呵成に書いたのであろう。八十三枚も執筆するその筆力に驚く。

貴司山治は明治三十二年十二月二十三日に徳島県鳴門市鳴門町高島で生まれた。本名は伊藤好市である。大正九年「大阪時事新報」の懸賞小説に応募した「紫の袍」が選外佳作(三等)となったので、九月に大阪に出て大阪時事新報社の記者となった。大阪在任時代にも日記を書いている。貴司山治の残されている日記は、次の五冊がある。

- ①大正十五年(昭和元年) 一月一日〜十二月三十一日
 - ②昭和九年三月二十六〜十二月九日
 - ③昭和十一年一月一日〜八月二十六日
 - ④昭和十三年一月一日〜十二月三十一日
 - ⑤昭和十四年一月一日〜十二月一日
- これらの日記を閲覽させていただき、日記を紹介することを心よく許可して下さい。伊藤共治氏に深甚の謝意を表する。
なお、送りかな、句読点などは原文のままにした。

貴司山治日記

一九三四年(昭和九年)

三月二十六日

一月三十日からけふまで、五十六日間、杉並警察署の留置場に押しこめられてゐて、夜になって漸く出る。

この五十六日間の留置場生活の中で、すでに到来してゐるところの、重苦しい社会情勢に対応して、とにかく何程かの作家として自分を生かして行くために、合法的な範圍にまではっきりと自分の文学上の仕事を退却させることに考へをきめた。随つて過去数年間の「文学苦行」が今度はすっかり姿をかへてしまふ、今後の時間ともあれ創作のための苦行となるだらう。そして、留置場と独房を我が家の続きとしたやうなこれまでの生活は終りをつけた筈だ。久しぶりに日記を復活させることができたのも、この方向転換のせいである。今迄は非合法的な聯関のために、日記といふものは書くことができなかった。一番肝心なことは頭の中で記憶しておいてどこへも書きつけないといふこゝ数年間の習慣も、もういらなくなつた。自分は今後党的な事物と一切手を切ることを決心した。今後の社会情勢の中で、非合法的聯関を有し乍ら一方で合法的活動をやって行くといふやうな條件は維持できない。私は去年一年間具さにこのこ

とを経験した。それは実にながい苦しい経験だった。日本の党は今
あらゆる意味からいってポロ／＼である。党が自己の側にくる作家
を指導し、その合法的存在を確保してやるだけの力を持つのは一体
いつの事だらう。その日を早く招来するために、一番いゝことは私
自身がすぐ様、党の活動に参加することだらう。去年一年中、さう
いふ考へに強く惹きつけられる機会はずあつた。しかし自分は
行かなかつた。それは単に自分の怯懦のせいではない。自分は子供
の時から猛烈な文学の志望者だった。党に接近し、党にはいること
を考へる時、その考へをおしとめる大きな投影となるものは文学で
あつた。私は作家としての資格の上に政治家の資格をほしいとはち
つとも思はなかつた。故小林などは作家の到達点を政治家に置いて
ゐた。これは間違つてゐないやうで、実は大きな間違ひなのだ。レー
ニンはあれ程文学を愛好し、文学に深い理解を示した。恐らくレー
ニンの文学に対する認識は例へば文学の「専門家」だった筈の故小
林に数倍或は数十倍するまで深くかつ正しい。にもかゝはらずレー
ニンは決してかれ自身文学をやらうとしなかつた。自分は文学に一
生手を出さないのであるといふことを、心の底からくやしがりながら。
共産主義者といふものは、いひかへればそれは完全な立派な人間
といふことだ。随つて政治的、全体的見地から、彼れは何に對して
もさうである如く、文学に對しても正しい理解を持つ。けれどもそ

のことは、必ず彼れが文学者・文学の専門家——でなければならぬ、
といふことには當たらぬ。レーニンはその区別をよく理解してゐ
る。作家は、なるべく政治的活動をなすうすぐれた共産主義者
であつてほしい。しかし、このことは作家一般にあてはめる定式で
はなくて、希望だ。故小林などはこのことを定式として考へすぎて
ゐた。すぎたるは及ばざるが如し。どう考へても小林の本質が政治
家たるにふさはしかつたとは考へられない。かれの文学はかれの政
治的活動によつて著しく育てられてゐることは事実であつても、よ
り多くかれの文学はかれの政治の犠牲になつてゐる。文学の完成を
政治の経験に求める——この単純な方程式は危険でさへある。多く
の場合、作家はむしろ政治家ではない。多くの場合、政治家が滅多
に作家ではないやうに。

故小林が政治的活動の中で「地区の人々」や「党生活者」を書い
た場合、へんな矛盾を感じた筈だと思ふ。かれが困難な活動に従事
する貴重な時間の中で直接かれの担当してゐる政治的任務のプログ
ラムとは一向関係のない小説などを書いてゐるといふことは、ある
場合、そんなものを書く暇に、あすの政治的活動のエネルギーを蓄
積するためぐう／＼ねてゐた方がよほどましたとさへ思へた筈だ。
ことに日本では、運動が困難で、人手が不足で、少しでも有能な党
員には、全く小説を書く暇などを与へることが不可能だといふこと

はだれにでもわかつてゐる。さういふ事情の中で故小林がムリをしてわざ／＼、小説を書く政治上の理由がどこにあるのだらうか？

もしあるとすればかなり間遠な理由だらう。結局彼れがもぐった後に小説をかいたのは彼れが政治家たる以外に或は以上に、作家であつたからだ。これが本當の理由である。そしてかれもレーシニンのやうに、政治か文学か、どちらかをハッキリ選ぶ必要をその時感しただらうと思ふ。或はまだそこまで、成熟した考へに達してゐなかつたかれしれない。それはかれの、文学・文化の運動の政治的見地からの指導があまり成功したものでなかつたことから考へても思ひ当たることである。

自分は去年の夏など、政治か、文学か、の問題に何度かぶつかつては、一応も二応もなく、文学に対してはるかに多くの愛着と自信を感じた。それは自分が政治家的な素質を持つておらず、文学的な素質を持つてゐるといふことのハッキリした自覚の故である。結局自分は作家としての自分を選んだ。このことは少しも間違ひでない。しかし、文学者としての立場を選んだ瞬間に、政治に対しては客観主義的な態度しかとれなくなつて行つたことも亦本當だ。私の場合、自分が文学者であるといふ自覚は、自分が不完全な臆病者であるといふことにも、かなり相通じてゐる。

所で一方、去年一年中かゝつて、日本の党は發展する代りに、実

にみじめに破壊されて行つた。日本ブルジョアは政治的にまだ／＼プロレタリアートに優位した実力を持つてゐる。プロレタリアートの勝利の見通しといふことは、人は口ではいふことはできる。実際にはしば／＼それがブルジョアジーのために撃破されてゐる。

去年の年末に、いわゆる赤色リンチ事件がおこつた時、自分はつく／＼日本の党の思想的、政治的水準の低さといふものを感じ味はされた。自分の文学の仕事の指導誘掖を党からうける望みといふものが殆ど当分一可なり長い先きまでの当分だ一不可能だといふことを、痛感した。各国の党がその国のプロレタリア文学・芸術の指導の実力を持つやうになつた時は、もはや一人前である、といふことがしば／＼いはれる。芸術の指導といふことは、党がマルクス主義的に最も深い経験・最も高い思想を持つてゐなければ不可能であるからだ。党がもしその点で少しでも欠くる所があるならば、必ず芸術に対するあやまつた政治的干渉、その効利的支配、官僚主義的「指導」をまきおこす。芸術はかやうな「指導」のもとでは必ずその發展が阻まれ、作家の間には唯徒らな混乱がなげこまれるだらう。現在の日本の党（一九三三―四年）が最も複雑な特殊なイデオロギー的形態たる芸術の發展を合理的に指導しうるといふことはまづ望めないのである。一方、それでも、とにかく日本のプロレタリア文学は、國際的影響を受け入れつゝ相当高い段階にまで経上つてき

てゐる。一九三一年度には、党は蔵原惟人のやうなすぐれたインテリゲンチヤを有することによって、この間の芸術の発達を指導した。しかし一九三二年の夏から逆に党は芸術の流れを適正に導く力を失ひ、これをあやまつて、せきとめ、悪い状態に氾濫させてしまつた。小林、宮本がこの時期に党にゐたわけだ。一九三三年に入ると党は益々その方面の力を失つて氾濫をひどくさせた。私は党の支持者として、党の文学指導の方針の側に立ちつつも、党の側から次第に無遠慮に背反して行く作家——作家の間に増大する混乱を眺めて、自分自身の去就に迷ふばかりであつた。

私の推そくしうるかぎりの、文学・芸術の指導に當つてゐる党メンバーは、文学芸術の経験に浅く、それよりも悪かつたことは、プロレタリア文学の基本的な実践形態として党の側から宣伝し主張されてゐる工場文学サークルの実際の活動を現に少しもやつてゐないし、やらうともしない人々であつたことだ。かくては指導が無力になるのは当然である。一九三三年にまじめに文学サークルのじみな仕事を熱心によつた作家は党内にも党外にも、一人もゐない。かくいふ私一人である。一九三三年の末になつて、私は党の方針のたゞ一人の実践者だつた。そして私は党の方針のとにかくよき部分の支持者として、サークルからいかに、真実のリアルな文学を産み出さうるかといふ問題を經驗を通じて語りうる唯一人の作家だつた。そ

のことを感張るのではない。むしろ私のその経験は貧弱なものである。それにも係らず私の外にだれ一人、さういふ真面目な文学上の努力をしてゐるものがあるといふことは党の文学指導の方針の全体的支持者としての自分自身の姿を敵の前に目立たしくさせる結果となることは明らかなことだ。

私は去年の暮から、検査されることを覚悟してゐた。黨員でも何でもなく、党活動の直接の参加者でもなく、唯党の方針のある一部分に自己の文学上の方針を一致させたといふ態度だけで、その作家を「危険」な地位にさらす程に、わが党の政治的勢力といふものが少くかつ低いのだ。

私は予期の通り捕虜となり、二た月近く、シラミと南京虫の國を旅行させられつゞけた。その間、私は文学者としての態度について、蔵原惟人と中野重治の二人のことを考へた。この二人は文学者として、然も政治に対して客観主義的態度をとらなかつた。このやうに、政治と文学を實踐的に一致させるのがほんとうのプロレタリア作家の態度であらう、と。尤も私は蔵原と中野を同列的には考へなかつた。蔵原は作家でなく、理論的指導者として、より政治的素質にすぐれており、中野は少しも政治的でなく（作家の集会での活動では政治的な一面もあつたが）それ以上に詩人的文学者素質者であつた。かれらは捕はれて、プロレタリアートとして態度を少しも変へる所

なく維持してゐるために、——（藤原は政治家としての立場からさうしてゐるやうだが中野はそれとは大分違ふ。かれはプロレタリア作家として、党支持者的態度をかへないといふ立場に立つてゐる。随つて中野のことを、自分と比較する上で、留置場内では實にしば／＼考へつゞけた）——社会的活動の自由を失つてゐる。本来ならば私は中野と同じ態度をとらなければいけないのだ。

去年中、実は私はハッキリその覚悟でゐた。中野と同じ態度とることによつて二年か三年の刑をくひ、出て来てから後のプロレタリア作家としての立場を確保しよう、と。二年や三年そのために作家がその創作活動を休むことは大したことではない。又二年や三年、刑務所の中で暮らすことが作家にとつてさほど異常な出来事でもない。作家は、正に大衆の儀表たるべきものでなければならぬ。——さういふ考へでは、私は藤森のやうにするく、立野のやうに小心に、林の如くでたらめに、刑務所行きを回避しはしなかつた。事實留置場に二た月ゐてもさう苦しいとは思はなかつたやうに、私は例へば立野の如く、警察や刑務所を怖がりはしない。それなのに、さうした去年一年中の私の決心を動揺させたものは、検挙される当日の朝日新聞に發表された治安維持法の正案の條文だつた。

今度の改正案は文化運動に対する弾圧に、この法律の機能を拡張

したもので、コップ諸団体の合法性の剥奪がその主眼となつてゐるだらうことは前から判つてゐて、去年の十二月に旅行からかへつて以来、私はそれへの対応策としてコップの自発的解体（この主張の理論的根拠はあとへ書いておく）を内部で主張してゐた。實に、十二月から一月の間において、コップ内部で最も正しくコップ全体の解体を主張したのも亦私一人きりだつた。

私はコップがなくなつても、プロレタリア作家として、より以上に活発にやつて行く積もりであつた。ことに去年中かゝつて準備した「地下鉄」が漸く緒についたばかりである。——。

ところが治維法改正案には「党支援関係の禁止」の外に「党スローガンの宣伝行為の禁止」なる條文が含まれてゐた。このことは今までもしば／＼ブルジョア新聞に報道されたのだが、それは当局のわれ／＼に対する恫喝だらうと視てゐた。ところがさうぢやなかつたのである。

私が一昨年治維法の囚人となつて渋谷警察署のフタ箱で、刑務所行きを待つてゐる頃、警察の役人が私に向つて次のやうなことを述べたのを覚えてゐる。

「こゝ数年間、治安維持法の被告について左翼運動に這入つた動機を書かせたその統計によると、プロレタリア文学の影響が九〇％を占めてゐることがわかつた。プロレタリア文学の影響の中では君の

「ゴー・ストップ」が六〇%をしめてゐる。——現在の治維法では之を以て君を処罰することができないので、君が党へ金を出したといふ事実を口実として起訴するのだ。将来はプロレタリア文学の内容が直接治維法に触れるやうに、改正されるだらう。」

当時、私はさういふ時機の到来することを予測してゐた。そして、何といふ恐るべき時代がやつてくることだらうとイヤな気がした。しかしさういふ時代のくるまでにはまだ少くとも六七年は間があるだらうと思つてゐた。所が二年たゝない間に、早くもそのやうな時代がやつてきたのだ。

この「宣伝行為の禁止」といふ改正案は、プロレタリア文学、芸術の内容を破壊するためにあらはれたものに相違ないのだ。こゝ数年間の、われ／＼のプロレタリア文学運動の発展のあとをふり返るならば、決してわれ／＼に対して安閑としてゐたことのない支配階級が、現在このやうな「改正案」を持出してきた事情はたやすく察せられるのである。

恐らくこの改正案の實施された後の社会に於いては、一九三三・四年まで、相当の、主として実践上の、誤謬を伴ひながらも、停滞することなくその段階をおしすすめてきたわがプロレタリア文学は合法的場面においては、その自己の理論と実践から非常に大きな退却をする外なくなるだらう。それは今日までに開拓してきた理論の

実践——といふ観点からみるならば、そんなものは恥しくてプロレタリア文学とはいへないとはざるをえないくらゐの、自然成長的なプロレタリア文学へ——乃至は同伴者の文学への退却だ。そこでは、唯物弁証法的な創作方法は殆ど十分に用ゐるといふことが不可能である。プロレタリアートの階級的必要といふ観点に即して重要な題材を創作の対象にとり上げるといふことが殆ど不可能である。いやこの「不可能」なら現在すでにさうだ。

退却して、われ／＼が今後合法的な場面で書きうる小説はさういふ重要な階級的必要に即したのではなく、もつと自然生長的な、ブルジョア的な創作方法からでも生まれてくることの可能な範圍のものに、まづ題材の上で制限されてしまふであらう。

今日は、林だとか武田だとかの作家の創作が、傾向としてすでにさうである。すべてのプロレタリア作家が、林や武田がこれまでも（かれらにはこれこそ）プロレタリア小説だと思つてゐる範圍の題材を畫く外に仕方がない世の中になつたといふことは、プロレタリア作家にとつては大きいいへば驚天動地である。

私はそのことを考へて、重たい気持ちになり、顔色をかへたやうな面持で新聞を眺めながら、朝のみそ汁をすゝてゐた。一体これからどういふ方針で仕事をして行けばいいのだらうか？ と。

そこへ「きッさん！」「あけて下さいッ！」といふけたゝましげ

な叫び声かきこえた。玄関のドアはカギがかゝつてゐたのではなかつたが、把手が少しあきにくいのである。私は一瞬間一寸いぶかつたがすぐに「来たな」と思つた。それでも三分くらゐは、さうではないやうに折りながら、仕方なく玄関をあけに行つた。と、小汚いちょこ才奴らが三頭顱、よこれたオーバー、帽子といふいでたちで、おの／＼手に犬殺し用のやうな棒を持つておしこんできた。

「警察のモンです。あんた、きてもらはなければ……」

と先頭の若い男が必要があればいつでもすぐにそうできる職業的な陰悪な面相になつて、私の腕をつかみそうにした。

「ちよつと待て……」

と私はもとの食堂へ引つ返した。スパイたちはクツをぬいで上りこみ、折り重なるやうにして、食堂へはいつてきた。

「めしを食ふ間、そこに待つてゐたまへ。」

と私は茫然といつた。そして汁をのみ、飯をくつたがちつとも味がない。私は箸をすてた。

「着物を出して……和服のオーバー、シャツ二枚、……今度は長くなるからね。」

と私はあとの言葉を小声で妻にいつた。悦子は眼を丸くして箸と茶碗を前においたまゝ固くなつてゐた。私は妻を促して二階へ上つた。着物の類は二階にあつたからである。闖入者たちはくつついて上つ

てきて、二階の書齋へふみこむと、てんでにそこらをかざり始めた。

私は着物を着かへるところの騒ぎでなく何をするかわからないこの泥坊連を監視するために、書齋に突つ立つてゐた。しかし、かれらは本気で捜索する積りはないらしかつた。のみならずがざりぶりが幼稚で下手くそだつた。相手は私がくらうとだといふことを承知してゐる。で、あまりかれら自身の個人的な趣味で深入りしたがざり方をして、私からかれらの泥坊根性を見すかさされるのを憎れてでもゐるやうな様子だ。一人の男は嗅ぎ廻るのをやめて、椅子に腰をおろして、うつむいてそこにあつた「ロシア怖るべし」といふ画報をめくり出した。

かれらの、情けない仕事が一段落終つてから私は書齋の隣の部屋で妻を相手に着かへをした。スパイはそこへもはいつてこようとしたが、機先を制して私がスツバダカになつたのでさすがに、足をふみ入れなかつた。私は妻と二人きりになつて、留守中の注意をし、逢はねばならぬ人の断り、その日午後一時から作家同盟の中央委員会が現にかれらの嗅ぎ廻してゐる部屋で行はれることになつてゐる——そこで審議するために私の書いた四十枚あまりの原稿のありか——などを一々妻におしえておいて、おしまひに妻の頭をかゝえて接吻をして（その時かの女はのんきそうな表情になつた）、役人とも待つてゐる書齋へ出て行き、自分から行こうとはいはないで、

黙つて立つてゐた。

しかし、時計をみると十一時半だ。中央委員会は一時からだか、二三の者は十二時になるといふことになつてゐた——ぐず／＼してゐてそれらの人が一緒にひつかゝつては大変だと気がついたので、これらの促すままに、私はタバコに火をつけ、それをふかしながら、もうその時はかれらが押入つてきてから物の一時間もたつてゐたから、落ちついてしまつて割りに楽な気持ちで下駄をはいて外に出た。すると裏口の所に、子供がトミチヤにおんぶされて立つてゐた。いつもなら、私の出かけるのをみたら声をあげて騒ぐのだが、けふは何事かかれも亦生き物の本能で異常をさつたらしく、妻に似た大きな眼をみはつてまばたきもせず私の方をみてる。

私は子供と顔を合し、一寸行くのがたまらない気になり、引返して傍へ行き、頭の毛をなでてやり、頬をさすつてやつて、何か言葉をおかけたのだが、子供は用心して頑固に黙つてゐた。

通りの角に自動車待つてゐた。杉並警察署までは物の十分とばかりなかつた。私は特高の部屋で夕方近くまでおかれ、顎にひげの生えた、噂によくきいてゐた草間といふ主任に何だか彼だかと話しかけられ、留置場の中へはいるのを急ぐ必要はちつともないので、私も一々相手になりながら、時をすごした。たしか五時頃になつて、「中」へ入れられた。「中」へはいるまで、「主任」との話では去年

の十一月に一度「検挙」しにきたさうである。それからその前に、渋谷署からもやつてきたのださうである。私は自分のゐる所轄署へ届を出して十月下旬から旅行してゐたので留守へ御光来になつたわけだ。検挙を命令した警視庁では、私が逃げたと一度は思つたらしかつたが、旅行届が出てゐるとわかつて、かへるまで待つてゐたといふのである。そしてけふの検挙は警視庁の、係り警部鈴木の指図だから、その理由はこゝではわからないといふのである。それはかれらの常套語である。私は留置場へはいつてしまつてから、板の壁にもたれながら、けふのやうにして検挙される直接の理由について金協金属のことが去年の夏からバレてゐることを思ひ出してゐた。

しかし検挙の最大の目的は、やつぱり、作家としての自分の、プロレタリア的な、コツプ的な存在に対する弾圧だらうと、考へた。どつちにしても、二つとも余程前からその覚悟でゐたのだから、自分がこゝへ来たのも、自分からいつても順序通りのプログラムの進行のやうな気がした。

で、私は留置場の中の二三日間を、私自身今後どうするかを、ゆつくりと考へることにすごした。どんなに短くても三ヶ月位は放さぬだらうし、かつその上で私の態度が強ければ保釈の取消しか、何かの名目を設けて新しく又起訴するかするだらうし、どつちにしても、相当こゝに腰をすえてゐる外はないのだ。だからゆつくりと考

へ事に耽つてゐていゝわけだ。

私の考へ事といつても、こゝへ来て始めて湧いた新しい考へといふものは何もなく、皆去年の特に夏すぎから、考へつづけてきたその続きである。一と口にいへば、今後のプロレタリア文学運動はどうなるべきか、いかにすべきか、自分はこれからどうすべきかの二つの問題であつた。

一九三二年の暮、自分が出獄してから、又三三年二月に小林が虐殺されてからの、プロレタリア文学運動の内部には巨大な萎微沈滞の時期がやつてきた。いやすでにそうした傾向は自分たちが検挙投獄された直後から起つてゐて、小林などは非合法生活に入つて、極力そうした傾向と斗つてゐたのである。しかし、その傾向は一般的に増大するばかりで、小林の死後、三三年度はまことに美事な沈滞が支配した。その直接の原因は、鹿地、山田、川口の三人を中心とする同盟幹部の無能力からきてゐる。かれらは小林の死後、めい／＼の検挙を怖れて逃げ廻り、文学新聞や「プロレタリア文学」の編輯刊行をサポートし、極力何もしないやうにしながら一方では書記長だ議長だといつた地位に、極端にかちりついた。そのかちりつき方は不思議なほど執念深かつた。たとえば、三三年春の大会だ。右の三人を中心とするその系統の幹部たちは、大会をうまく組織し遂行する力を持たなかつた。おまけにかれらの一流の極めて反良心的な、

固息な小ブルジョアの習俗に富んだ互ひの馴れ合ひでとかくの情勢にかこつけて大会をサポートした。そして大会を分散的に、非合法的にやる必要があると称して、その実、いゝかげんに自分達のブロックに都合のいゝやうにして、自分達のブロックだけで「役員」を独占してしまつた。そういう仕事になると、川口、鹿地、山田といふ三人の男はなか／＼「手腕」があり、イキが合ふのである。かれらはその際、方々で盛んに、同盟の極めて小さな一単位である「吉祥寺班」をデマツた。「吉祥寺班」は、かれらの大「野心」の遂行にとつて大きな目のうえコブたつた。いや「吉祥寺班」といふよりも江口と私が目の上のこぶなのだ。特に三人にとつていやな人物は貴司山治であつた。山田は関西の代議員を集めた席上で貴司が口ばかりでとやか／＼いつて同盟の仕事にちつとも参加せず、あんなのは客観主義といつてよくない傾向であると宣伝し、その代議員の中に二人だけ、私の家に泊つてゐるものがまじつてゐるのに気がつくとはあはてて「しかし貴司君は最近小林全集刊行会の仕事をやり出した」といひわけをしたそうだ。だがもつとひどい中傷だと思つたのは「吉祥寺班は酒をのんで班会を開いた。」といふことを文化聯盟や党の線へしたり顔に、報告してあつたことを発見した時だつた。その報告をねつ造したのは三人の百分のロボットだつた佐野獄夫である。佐野が三人にそういうことを告げ、三人承知の上で佐野がこ

ツブの書記局への正式報告の中にまでそういふことをつけ加へたのには、大いに理由があるわけだった。それは江口が佐野に対してつまらんことをしやべつたのが動機である。江口といふ年とつたこのしまりのないおしやべり屋は、佐野のやうな男をつかまへて、鹿地が故小林に對立し、小林たちが支持してゐた文化サークルに関する党の決議にどこまで抵抗したといふことをしやべり、「党の統制の上からいへば鹿地は銃殺ものだぜ」といつたのである。その際、江

口は「鹿地・山田輩は役員病患者だが、吉祥寺班には逆に役員忌避病患者が一人ゐる。それは細田民樹だ。役員にならぬやうに手を合はしてたのむので班では細田を役員にするせしないことにし、無事落選したらビールをおごるといふことになつてゐる」といふやうなことも一緒にしやべつた。

とにかく佐野はお家の一大事とばかりとんでかへつて山田・鹿地・川口の「三巨頭」にそのことを注進に及び三巨頭は悲憤こうがいして「党の内部のことが江口などにもれてはわれ／＼はたまらない。これはきつと江口に対して、貴司がしやべつたのだらう。とにかく、こういうことを外部にもらしたことに對して嚴重なる責任を問ふ」といふ意味のことをかれらはコツブ書記長に向つて抗議したらしい。又かれらが江口がしやべつたことを、何故私の方へ転化して、私を目角にとるかといふことは、私がコツブ（隨つて党の）

文化サークルの方針を支持しそのやうな評論をかき、出獄以來コツブ的な存在としてかれらの目に映じてゐるので、かれらにとつてはどうせ貴司があゝいふ風な態度でゐるのは党の線に何かの方法でふれてゐるからに違ひないと思つてゐるためである。そして三人は小林全集刊行会の仕事で私と共働するやうになつた保釈出獄中の宮木貞久雄に對して「尚よくそういふ噂の出所を君は貴司君などに接近してゐるのだから調べてくれ」とたのんだそだ。

一方三人から抗議をくつたコツブの書記長は當時もうコツブ書記局は完全な非合法に陥入り、書記長はコツブ内党フランクシヨン・ビューローの書記長をかねてゐるといふことが敵の前にまるで公然の秘密となつてゐることを、自分の方でもずるずるべつたりに承知してゐたので、抗議をくふと同時に、抗議の内容が党の問題でもあるので、党として、党からといつて私をよび出しにきた。その使は宮木で、宮木と一緒にやつてみると、約束の場所へきてゐるのは潜行中の杉本良吉だった。その時はもう夏だったので杉本は縋の羽織を着て色の白い、色魔のやうな顔に、こつけないな ちよびひげを生やしてゐた。かれは「きいたでせうが、江口のしやべつた鹿地の問題について、作家同盟の中央常任のある人々から、洩らした経路を明らかにしろ——といふ抗議がきてゐるんですがね。」といふのである。

「で僕にどうしろといふのですか？」私は杉本良吉を写真では知つてゐたが、ご本尊をみるのははじめてである。かれがもぐつてゐるのはもう二年越して、その間に文化運動には幾度かの転換と激動の時期があつたのだから、もぐつて何等かの部署についてゐる筈のこの人などは、もとから相当の政治的能力があるならば、われ／＼にもつと手答えがなければならぬ筈である。所が杉本だとか生江だとか手塚だとかいふ名だけは前からきいてゐる党活動者は時々何かの折りにその名が出ると「あいつまだつかまらなひでゐるんだね」とかもつとひどいになると「手塚はつかまつたんだよ」「いやまだゞよ」とかいふ風にはれる位、われ／＼の間に存在の勢力がないのである。勿論これらの人々が党の一兵卒として、テロルに対する固い決意を持つて困難な仕事に従事してゐるだらうことは想像にがたくない。党活動は何も個人の活動ではないのだからそうした無名戦士の多くの働き手によつて全体としての英雄的な活動があらはれるのだといへばそれまでの話だが、それにしても、われ／＼の間に、蔵原惟人といへばかれがもぐつてゐても実に大きな存在であり、かれがやられたと知ると衆皆失望落胆するといふ有様で、それ程に匿名でかく、かれの指導的論文からの影響をうけ、かれがどこかにゐるといふことのために勇気づけられてゐる者が何百人、或は何千人といつてあつたのだ。杉本などは成程やられてからの態度は蔵原や

宮本、小林以上に立派だつたらしいが、コツプの書記長として、文化運動者としてのかれから、私などは全く何の影響もつけた覚えがない。逢つてみると成程、何よりも杉本などは政治的能力が大へん少ないといふ感じなのだ。

「僕の方としては江口がだれからそれをきいたか一応しらべなければならんし、統制の問題として、成程鹿地などの抗議がムリはないと思ふわけです。何しろ組織の内部でそんなことが噂として伝はつては合法的にやつてゐるFの連中はたまらんですから。」

「だから、はっきり統制を示さうといふんですね」
「さうです。」

私は杉本といふ男がこゝいふ問題に、こゝいふ風にこだはつてゐるやうでは、政治的に無能力だといはれても仕方がないと思つた。

私はからかふ氣持になつて答えてゐた。

「それなら、きまりきつてゐるぢやありませんか。」

「といふと……」

「だつてあなたの方は——党は——Fをばらしたり、党内の秘密を、江口のやうな党外の人間にしやべつたりする筈はもと／＼ありえないことでせう。」

「勿論」

「ぢや、作家同盟の抗議をよこした連中に、その通り答えて、以て

の外であるとか叱りおけば沢山ちやありませんか。」

「しかし……」

とかれは幾分テレたやうな表情で

「噂が事実であるとすれば……」

「そんなことにこだはるのはいかがしてゐますよ。第一、作家同盟の連中がどんな意図でそんな抗議なんか持出すのかわからんわけではないのだから、ます／＼あなたの態度はへんですよ。」

私がそういう風にいひ立てるので杉本はとりつく島がないと思つたのか、それとも考へが變つたのか、沈黙してしまつた。私はこのことのために私をよび出したかれの底意がけしからんと思つて腹の底では幾分憤慨してゐるのである。かれが黙つてしまつたから、私は答えてやつた。

「僕がそういうことを江口にしゃべつたとあなたは思つてゐるんでせう。成程僕は死んだ小林からそういうことをききましたよ。しかし一言も口外しませんよ。そんな道理がないちやありませんか。川口とか山田とかは、このことで僕を目角にとつてゐるそうだが、けしからんですよ。」

杉本は賛同するやうに真面目な表情になつてうなづいた。エロ吉などといふ雑名があつて女をたぶらかすのにはとても冷酷な男だときいてゐるかれが、逢つてみるとたゞの善人だと思つた。実は江口

には私がそつとしゃべつたのである。江口がきつとだれかに放送するだらうと予期して……。しかし、私は必ずしも鹿地を陥れるのが目的ではなかつた。その少し前、鹿地自身が、死んだ小林のデマゴギーをふりまき始め、小林は敗北的な気持になつて小樽へかへりたといつてゐた……といふことを方々へ放送したのである。それから宮本には、党中央部の決定といふことを承知の上で、文化サークルの方針に反対したといふことをしゃべり、僕は処罰されても仕方がないんだ……といふことをしゃべつてゐるのである。私は鹿地をとにかく不屈な奴だと思つた。かれがこの二つのことを（小林のデマとサークルの方針に反対したこと）尚ほも方々へ巧みに宣伝する恐れがあると思つたので、もしそんなことをすれば、その結果がどんな風にひろがるかといふことを目にもみせてやる必要がある——と私は考へた。そこで江口の軽口を利用するのがいいと思ひつた。私は江口の正義感を煽るやうに、鹿地が小林のデマをふりまいてゐることと、サークル方針に反対したことを、告げたのである。江口は委員長をやめさせられ、自分の代りに山田が中央委員会の議長とかいふお手盛りの役目についたのを怨んでそういう策動一切を鹿地・山田ブロックがやつたと信じ（又それでもあるのだからうし）鹿地と一入嫌つてゐたので、私の話してやつたことは江口にうつては火に油をそゝがれたやうなものであつた。かれは胸におさめ

かねて、佐野が来た時に、佐野などにしやべれば鹿地につゝ抜けたといふことをわきまへる心の余裕も何もなく、「鹿地はけしからん奴だ」といふ風に、二つの問題を、しやべつたのに違ひない。事は案外早く思ふ壺にはまり、山田・鹿地・川口プロックは江口にまでそんなことが伝はつてゐるのに、仰天し、その背後に貴司山治が策動してゐるかもしれぬといふことをしきりに感じて怖れ、宮木をとり入れて私に対するスパイにしようとしたり、方角違ひのコツプ書記長杉本にねちこんだりいささかあはてふためいてゐるのである。山田などは宮木をつかまへて「君は貴司などと違つてまだ健全分子なんだから」といふ風に抱きこみをやつた。大体かれらは三三年の大会で自分たちだけできめた役員や方針を「大会」の名で決定してしまふ間、三週間以上、コツプとの聯絡を切り、何といつて呼び出しても出てこず、やつと出て来た時には佐野が書記長になつたり、怪しげな中央委員会がでつち上げられたあとで、コツプの方ではみことに一杯くはされ、杉本や池田が作同のこのやり方、作同といつても、鹿地、山田それに川口あたりの——にあきれてしまつたゐる、といふことを私がきいたのはまだそう遠くないことだつた。そういふ風に仕向けられても小林以来、コツプ書記局は、作家同盟のその連中に対して何の処置もなしえないのである。今ではもうコツプ書記局乃至書記長の無能といふことを、鹿地や山田の方でよくのみこ

んでしまつてゐるのだ。それでこそ、今度のやうに遂にねちこまれて、それを又杉本のやうなお人よし、が、まじめに悩んでゐるのだ。

——杉本は腕時計をみて、もう別れて行きたそうにした。私は別れるまでにせひ自分で立てたプログラムを全部とにかく遂行してしまはないと仕方がないと思つたので

「しかし僕にはそういうことが江口のみならず方々へもれてゐる……もらして歩いてゐる人間の心当りがありますよ。」

「へえ……それはだれですか？」

と杉本はすぐ乗つかゝてきた。私はわざと急いで答えないで

「僕が小林からそういう事情をきいたのは二月上旬ですがね。その一と月前に……僕が保釈で出てくるとすぐです……そういうことをききましたよ。壺井の細君とか村山の細君とかが皆そういうことを知つてゐるんです。コツプのいろんな部署で働いてゐる者は皆知つてゐやしませんかね。」

私のいつたことは少し嘘だつた。三月頃宮下が保釈で出てきて、壺井の細君の家に同居してゐる間に村山や壺井の細君連の間でそういう話を耳にしたといふことを私に宮木が話したのである。どつちにしても同じことだと思つて私はこの場の話に効果を持たせるよう、少々時期をくり上げて言つたのである。

「それでよく調べてみると、サークルの方針に反対したといふ話は、

鹿地自身が洩らして歩いてゐるんです。もし査問委員会にかけるのならば、かける人間は鹿地なんです。山田や川口にそう返事してやればどうです。」

私は鹿地が村山の細君にそうしたいろんなことをしやべつてゐるらしいことは、村山の細君の口裏から察してゐた。私には村山の細君のやうな女性は大へん苦手で、なるだけ近づきになることを避けてゐたのだが、五月頃、鑿子さんの育ててゐるセプアードの仔犬を一頭ゆずりうけたゞめ、交渉が生じ、犬の代金の月賦の金を持つて行つたりした序手に、犬の話とか世間話とかよりも、ぜひともしてかのみたそうに文学のいろんな話をして、ことに獄中から主としてか的女によこした蔵原の手紙が本になつて出版され方々で評判になつてゐる時だつたので、その書翰集の内容のそちこちについて、しきりに私の考へを問ふのであつた。その際の女は、鹿地が小林とひどく対立し、党からうとんぜられつゝけたが、蔵原の新しい意見の一部が小林などの機械的な一部の考へを訂正してゐることからひいて、小林に反撥した鹿地が今になつてかあいそうだといつて、かれに對する同情を表明するのであつた。それでみると鑿子さんは鹿地と交際していろ／＼な内部的な秘密の話をはつきりか暗々にか鹿地からきかされてゐるらしい。しやべつて歩いてゐるのは鹿地ですよ——といつた時には、私の頭の中にはそのことが浮んでゐた。それ

からつゞいて言つた。

「ことに、鹿地は小林のデマをふりまいてゐる……」

と私は小林について鹿地のいつてゐることを伝へ、

「今になつて何の意図でそういふことをしやべるか、死人に口なしで鹿地のやり口はバカだといへばそれまでだがタチが悪いですよ。山田や川口がコツプへねぢこんでゐるのならば、一つそういふことも明らかにして、大会以来のかれらのやり方をとつちめたらどうです。」

その時、杉本は額の汗をふいて

「いや、それはおどろいたなア。小林が成程ある時、ある場所でそういふことをいつたのは僕も知つてゐますよ。嘘ではない。しかしそれは小林君が冗談にそういつたんで、それをそんな風に悪用するのはよくないなあ」

こゝで物足りないのは、鹿地がその時池袋署か杉並署かへ留置されてゐてゐないことだつた。いつかへつてくるかわからないし、本人のゐない時に、問題を徹底的にせんじつめるといふことはできないからである。山田や川口は鹿地に牛耳られてゐるお勝亦なのだから、その二人しか今ゐない時に、事を荒立てても結局龍頭蛇尾に終るだらう。で、鹿地がかへつてきてから問題にしやうといふ杉本の言葉をきいてそれがよからうと思つたまゝ、私は、別れて自宅へかへつ

た。この会見の間、宮木は傍についてゐたが、かれはこれだけでの、応酬をハタで見物してゐて、コツプ書記局の無能といふことを更めて感銘し、貴司といふ人間の人の悪さが相当タチの悪さにまではいつてゐることを感じ、山田や鹿地が、貴司をたえず煙たがりつゝ目の敵に思つてゐることを道理のあることに思つた。一方、宮木は貴司は山田、鹿地のやうな連中よりもはるかに「政治的手腕」があると思つた。その際宮木は貴司の「政治的手腕」とは小ブルジョア的な駆引のやり口がうまいといふことにはすぐに解釈しないでしまつたらしかつた。これはあとで、この時のことをいろ／＼いつてゐる宮木の口裏からの判断である。

序手に書きつけておいていゝのはこのことについての、中條百合子のおせつかいである。この人は指導部の中でコツプの流れを汲み、直接には鹿地に、ひいては山田、川口ら鹿地一派に対立する唯一の僅少な勢力であり、たつた一人の健全「左翼」分子であつた。だから本来なれば、自分など大いにこの時期に中條に親しんでいゝ筈だつたのだが、自分にはどうしてもこの人が親しく思へない。この人に対して湧くものは尊敬でなくて滑稽感であり、鄙俗感である。その理由は今こゝには省いておくが、とにかく、この人は「健全分子」といふだけのことでちつとも指導的实力ではなかつた。この女は指導部の中では人々を迷惑がらせる一大ジャズを奏しつづけてゐた。

それでも最大限に文学運動に寄与してゐると本人は思つてゐるのだから始末が悪いのである。ずつと前からそうなので、私は宮本顕治がこの人と結婚したといふことをきいた時、宮本といふ人間に対して信用のできる範圍がおのづからわかつた気がしたが、まことに中條百合子は急進的小ブルジョアがプロレタリア文学運動の中へ参加してきて良心的なあまりに、身の程を忘れた絶好の見本である。かの女に何よりもいけないのは、おしゃべりがすぎてちつとも勉強しないことである。この女は恐らく左翼へ転換してきて以来、その基礎的な教養を固めるための一冊の本も読んだことはないだらうと思はれる。

さて、その中條がどこからか——多分杉本か池田あたりから——鹿地一派の抗議事件といふのをきいてきて、目の色をかへ、どこかで宮木をつかまへて「あなたから貴司さんに、班会で、合法的に問題にできないことなどをやたらにしゃべらないやうによく注意なさい」とおせつかい立てをしたのである。宮木は之亦大してわきまへの深くない幼稚な一面の目立つてゐる男だし、よく噂を好むタチなので、すぐさま中條の話をありのまゝに私に私にしゃべつた。私は非常に憤慨した。「班会でそういうことを問題にしてゐる。」などとかの女は漫然ときめて、よけいな口出しをするいつものクセを、折があつたらとつちめてやらうと思つた。

間もなく何かの用でかの女が私の家へきたので、私は手きびしくかの女を詰つた。「班会で問題にしたといふ証拠を出していゝだらう。君はまるで僕らのデマをふりまいてゐることに気づかぬのか」と。

かの女は真つ赤になつて、機関銃のやうに何やらわけのわからんことをしやべりまくつた。要するにしらぬ存せぬといつてゐるのである。そこへ折あしく私の家に寄寓中の宮木茂久雄が外からかへつてきた。かの女は早速、宮木を別室へつれこんで盛に口論してゐた。間もなく宮木は出てきて、ブイと自分のへやへはいつてしまひ、中條は泣かんばかりの顔つきでかへつて行つた。

中條のことをこゝへこんな風に書くわけは、プロレタリア文学運動のこの時期における指導部員としてのこの人の位置や中身がそつくりよくこの話にあらはれてゐると思ふからである。

要するに、かくして客観的條件の困難の増大する時期に、内部的に、人的に、組織はもはや腐朽してしまつたのだ。

私がコツプの主観的要素の崩壊といふことに逸早く気づいたのは小林全集刊行会の仕事を通じて、全コツプのどの同盟のいかなる機関ももはやその機能が停止してゐるといふことを知つた八九月ごろだつた。

以来数ヶ月間に、状態は益々悪化した。この数ヶ月間に、特にそ

のコツプの、党の、文化運動に対する政治主義的偏向が、ソウエートにおけるラツプの解散再組織運動にてらし出されて一般に明らかになつてきたのである。文章の上にこのことをまとめて最も正面的にコツプの批判をやつたのは、流石に鹿地亘だけだつた。鹿地は始めてこの仕事において、さすがに川口や山田とは違つてナルブ内のフラクションたるだけの腕を示した。しかし鹿地の「

と「
」といふ二つのパンフレットの論旨には、かなりに危険なかれ自身の右翼的誤謬もふくまれてゐる。しかし、とにかく鹿地だけが、体系的にコツプの方針の欠陥をみごとに批判した。中條とか川口とか山田とか窪川（いね）とか、中央委員はいくらゐても、鹿地のしたこのやうな仕事はできないのみか、川口や山田はいさしらず、中條や窪川はてんで鹿地のやつた仕事の内容を理解もできないでゐた。

私はこれより少し先、十月頃から、内部的に、コツプ解体の意見をコツプへ持ち出してゐた。私はそれに関する主観的客観的情勢の判断において、結果からみて決して間違つてゐなかつたことを今なら十分にいふことができる。しかし一九三三年十月頃のコツプ（党）は、情勢に対する対策といふものをまるで持合はず、たゞと解体反対だつた。

一、治維法の改正案が実現すればコツプの組織の合法性がなくなる

こと。

二、文化運動の大衆的組織を非合法的性質のものにするのは、誤謬であること。(小ブルジョアインテリゲンチヤ作家の多くを包含すべき性質の文化運動は非合法組織としては殆ど成立しない。)

三、過去の政治主義的、左翼的伝統にわざはひされてゐるコップは自ら先手をうつて解体して、成員を他の新しい活動形態へ移行せしめなければならぬ。

これらのことが、最も責任のある党において、極めて観念的に取扱はれるだけで、少し具体的な対策としてあらはれてこないのが、つた。私は夏中ずつと全協金属の中央部の仕事に参加してゐたが、こゝでも、全協の再建拡大のための具体的方法として金属のイニシアチーフで全協が提唱した単独組合政策に対し、党はさまざまな観念的な主張のもとにこれに反対し、非難し、その実現を阻止してゐた。私のきいたかぎりの党の反対意見といふものは、取るに足らぬ机上論ばかりである。それらの党の意見は当時の赤旗その他に度々発表されてゐたといふことだから人が皆知つてゐるだらう。

しかし、この単独組合政策はプロフィンテルン第五回大会の決定であり、全協のオルグの実際経験から必然におこつてきた対策だつたのだ。之に反対する党は、では何を代りの対策として与へようといふのかといへば、首肯できるやうな対策が何もないのである。

当時、宮本願治などが党の指導部にゐたわけだが、この人達には「綱領」から「政策」までの仕事には十分に政治的能力が具はつてゐるやうだが、その次ぎの最もかんじんの「対策」を立てる上の手腕が殆どなかつたかの如くである。政策が、対策となつてどん／＼大衆に与へられて行く党でないかぎり、大衆と離れるし、大衆を指導できないのは当然の帰結だ。

党は全協を指導できず、之と対立し、全協の側にゐた私の観察では、党がその観念的傾向から、全協の発展を著しくこの時期に阻止したといへるのである。

この、党の政治的未熟さ、対策の欠如、が文化運動に対してもイカンなくあらはれたのである。私は三三年十月に、実にこの感を深うした。そして、仕方なく、入獄準備をかねて家族をつれて一時郷里へかへつた。

それについて、自分の文学者としての立場をひどく苦しみ考へたことを書いておこう。

ある斗士は右のやうな私の批判的意見をきいて「それだけわかつてゐるなら、自分でやるのが当然ぢやないか。君の態度は客観主義だよ」といつた。

その時は、私はそれでまいつたのであるが、あとで、どうしても腑におちない。第一、先方のいふことは正しいとしても、今日党な

りコツプなりのそうした大きな欠陥といふものが、私の態度が客観

主義だといっただけでは解決しはしないのである。それから、私はそれなら自分でやる——といふ壮大な第一流の考へを何度も自分の上にあてはめてみた。するとまことに不似合で、非実感的なのである。到底私はそんな柄ぢやない。斗士のいつたことが「お前の柄でそんな批判めいた大きなことがいへたもんぢやない」といふ反語のやうである。

さうだ。三三年中、私はコツプの側に立つて小林多喜二全集刊行会の責任者となり、金屬中央部の若干の仕事にも参加した。それらは、しかし、はつきりと、作家的欲求からおこつたことだといへる。私は全く客観主義だつたのぢやない。私にあつては作家的欲求で動く範囲が、限度であつて、それ以上にはみ出ると、そこに純政治家的な活動となつてくる界目がすぐに感ぜられ、その瞬間に私は動く興味を喪ひ、立ちすくむのだ。「こんな方へ突走れば——作家の仕事ができなくなる……」これがすぐにやつてくる私の意識だつた。要するに、私はその素質として文学者なのだ。このことは非常によく自覚してゐる。だから、どうしても意識なり、仕事の範囲が、政治家の場合よりも小さくなる。生活的振幅が小さくなる。随つてわからぬことは百%に政治活動をやつてゐる連中によくきゝたい。今までずつと私はそうして、「政治」にたよつて歩いてきた。評議會

のシンパのやうにしてやつてきた昔からさうだ。

このことは、文学に対する政治の優位性といふ命題を具体的に物語つてゐる。

そこで、ある一人の作家があつて、どこまでも作家的に動く時、かれは結局政治に対して、常にある程度の客観主義者であるといふことがいへると思ふ。作家の実践なり、政治に対する意見なりを、政治家の側から客観主義だといつてやつつけることは大体無意味なことだといへる。作家が政治家に常に転向するものならばいざ知らず、作家といふ範疇が存し、政治家いふ範疇が散存する以上、両者の関係は大体において作家が政治に依拠し指導されるのでなければ常態でない。要之芸術家の、政治に対するある程度の客観的態度はやむをえないことで、あながちそれを以て責むべき所以のものではないと思ふ。

私は三三年十月頃につく／＼このことについてひとり感を深うした。そしてふとゴルキイのことを考へた。ゴルキイはレーニンにたえず指導されてきた作家である。だがもし、ボルセヴィキ党中にレーニンのやうな人がゐなかつたら、ゴルキイは政治から作家として利益を享けたであらうか？ 恐らくその時はゴルキイが政治的にボルセヴィキに背反した時期に、ボルセヴィキによつて葬られてゐたかもしれない。

私は自分を何もゴルキイに比するのでは決してないけれど、プロレタリア文学に投じて以来、もし蔵原惟人のやうな批評家がこの陣営にゐないとしたら、恐らく私は党から作家としてさう大して利益を与へられはしなかつたに違ひない。蔵原がゐなくなつてから後の時期に、私は党から又党的な物から、全くこれといふ作家的利益をうけたことがない。勿論、蔵原がゐた頃よりは、はるかに私自身が成長したのもその理由である。十月には、文学運動に関する党的見解と相合はずして故郷へかへつた時に、私は漸く日本の党の成熟の程度といふもの——日本の労働者階級の成熟の程度といふものを再認識するに至つた。そして、こゝ当分少くとも三年や五年、或は十年も、私は党的——政治的指導を受けることなしに、自分の文学上の仕事をやつて行くだけの自信を持つてゐると思つた。今では文学において、党はかくいふ私自身よりはるかに後方にある——こゝはつきりと考へた。私は自分の文学の仕事の上に、現在の如き程度の、「政治」を必要とはしない。これが、現実の、私の場合における「政治と文学」のテーゼであり、公式である、と。この考へは、十二月に再び帰京していよ／＼確定づけられた。

帰郷してみると文化運動の情勢は形勢益々非で、拾取すべからざる一般的恐怖と混乱の状態に陥つてゐた。コップ及び党は相かはず十年一日の如く、成員の日和見主義を指摘し、号令や激励によつ

てそれをくひとめ、駆除することができるといふ考へ以外、殆どこれといふ対策を立ててゐないのであつた。

私はコップの自発的解体といふことをコップの線を通して、極めて強硬に、かつ解体の方法や時期、解体後の活動の形態をまで明らかにして、党に向つて主張した。私の意見はコップ書記局でとかくのセンセーションをおこした。その結果党の中央部のそのことの責任者が「事重大だから慎重にこちらでも協議するから、それまで自主的にそうした意見をどこへも出さないでくれ」といつてゐるといふことが私に伝はつてきた。その伝言をよこしたのは宮本だらうと思つた。しかし、十二月下旬に、風邪のため大阪でねてゐる妻と、妻の傍にゐる子供を迎えに行き、東京へかへる汽車の中で私は「宮本遂に逮捕される」といふ朝日の記事をみたのであつた。私の心はスーと暗くなり、萬事休す矣といふ感じがした。恐らくその時の党に、さし迫つた文化運動の問題についていくらかでも創意を持つてゐるものは宮本以外にゐないだらうことは明らかだつた。その宮本がゐなくなれば、文化運動はもはや最後の支え柱を失つた朽ち家の如く、てんでんばら／＼に崩壊してくることは火をみるよりも明らかだつたのである。

のみならず、宮本の検挙といふことはある意味で党中央部の一時的潰滅を意味してゐはしないかといふことも考へられた。

このことは、私の予想以上の姿となつて現実にあらはれてきた。

一月に入つてからか、はしなくも暴露した「赤色リンチ事件」。この事件は党が遂にマルクス主義者としてイデオロギー的に崩壊した姿である。共産主義運動の組織者としての能力を喪失した姿である。

そしてこれらの大破綻は、その時に突如としておこつたものでなく、党の歴史の中に含まれてき、それ／＼の時期に、それ／＼の形態であらはれてきた欠陥の総決算であつた。(日本の党の最大の欠陥は、十三年の歴史を通じてみる所、自己批判の能力の著しい欠如といふことである。)

勿論、日本に労働者階級が存するかぎりやがて党は再生するであらう。而して成長するであらう。しかし今自分の目の前で演ぜられた一九三四年一月の党の挫折は、何といふのろはしさか。かつてない位の惨憺たる破局である。(このことは、今これを書いてゐる三月下旬には、更に、かつてない深刻な内部的な、根こそぎの破綻であることがわかつた。宮本のゐなくなつたあとの、党の最も重要な部署は、あれほどの「リンチ」的清掃運動にかゝはらず頑強にスパイによつて占領され、リンチ事件のあとの、清掃運動の一方法として行はれた黨員の再登録——二月末日までに、全黨員及び党外積極分子がその斗争経歴を党へ提出したこと——が実にスパイの「政策」であり、根こそぎ的検査の準備であつたことがバレ、袴田と称する

「中央委員長」がそのスパイの元凶だといふことが盛に流布され、而も斗争経歴書を証拠物件とする疾風の検査が行はれてゐる等々。) これらの経過中に、コップ及び党は、文化運動に対して全然無対策といふのではなかつた。分教的活動形態への転換といふことと、団体外に外廓の文学雑誌を創刊する(作家同盟に対しては)といふことの二つが示されてゐた。

私はその第一の対策についてそれが不可能であつて、そこからは何も生まれて来はしないこと、来る二月中旬から下旬の間に、更に情勢が悪化して文化団体成員の活動分子の検査が必ず行はれ、そのあとではかゝる方針の施す道のないことを従来しばしばコップに向つて説明し、二月上旬、中旬の間に自発的にコップ全組織を解体し、作家同盟についていへば同人雑誌、進歩的文学雑誌(営利雑誌)にそれらのメンバーを結集せしめることによつてその合法面を確保し、おもむろに工場文学サークルを基礎とする革命作家同盟の非合法的或は合法的な再建をはかること、それは主観的條件の成熟の速度如何によつて何年先きになるかわからない——といふことを主張してゐた。一月に、私は作同中央常任委員会へよび出され、この解体系方針を主張した。その少し前に、私は中條、鈴木(清)、宮木、窪川夫婦等に個人的に私の意見をのべてかれらの意見をきいた。私はまだ自分の解体意見をコップの線へ出す以外、これらの人々にす

ら話したことはなかつた。宮木と鈴木は私の考へにすぐ賛成したが、中條と窪川夫婦は私の意見をきいてたゞ／＼慨嘆するばかりで、結局かやうな意見を抱いた私を非難するといふのであつた。それでは君は一体どうすればいゝのかと私はきいた。すると、窪川鶴次郎は言を左右に托して遂に何も答えず、答える自信が全然ないのだといふことが私にわかつた。中條は、どうしていゝのかわからぬと正直に答えた。窪川いね子は唯びつくりして目をみはつてゐた。

私を中央委会へよぶといふことは、中條あたりがコツプのいひついで、夏頃から度々會議に持ち出してゐたのであるが、夏頃にまだ川口だ、山田だ、何だかだと一族郎党が大分ゐたので、御大の鹿地が極力反対して実現しないであつた。中條はそれにもかゝらず、私の所へやつてきて中常委会へ出て鹿地ブロックにあたり、コツプの方針の実現のために斗つてくれと度々いふのであつた。私はその度びに固く断はつてゐた。その頃私は小林全集の仕事をしてゐたし、そういう／＼やれぬといふのが中條に対する辞退の口実であつたが、一方コツプから度々同じ話があり、小林以来、私はすでに明らかにしてゐる態度に基いて（これはあとへ別に書いておくつもりだが、小林は出獄早々の私をよび出しての話に、作家同盟内のフラクたる鹿地と対立し、自己の方針を伝えることができなくなつて、私を中央部へ入れ、鹿地に当らせようとした。Fでない人間をFであ

る人間にあたらせるために使ふといふのは組織的に大きな間違ひで、そんなことよりもまづ鹿地の組織的処置が先決問題だといつて私ははねつけた。それから十日程して小林は殺され、杉本、池田といふ風に書記長は變つたが、依然としてかれらは作同中央部に蟠る鹿地ブロックを処置できず、唯やたらに私とか、坂井のやうな人間を中央部へ入れて牽制しようとした。私はしまひには書記局の、随つて党の、無力を爰に嘲笑した。）ことはりつづけ、遂にこの時、（三四年一月）まではいらなかつたのだが、この時にはすでに情勢が一変してしまつた。鹿地側についていへば佐野はやられてかへらず、川口は田舎へにげてかへり、山田は執行猶予政策と称して、中央部の会合に顔をみせず、その他の鹿地系の中央常任はたいて退却してしまつて、今では鹿地は漸く鈴木清と共働してゐるのみであつた。そこへ鈴木から私の解散意見をきき、鹿地自身さういふ個人的意見を持つてゐたのをやはり党に抑止せられ不承々々分散的形態への轉換の方針を主張してゐた折柄なので、今では私を入れてもあぶなくないとわかつたので、貴司の中常委会入りにやつと賛成した。一方私の方からいふと、解体方針を作同内だけでも実現させた、そのためには中常委会へはいる必要がある、こと、及び鹿地の書いたパンフレットによつて、小林以来の政治主義的偏向といふものがかなり深く私にも肯けるので、Fのくせに党と対立したいとい

ふことをいつまでもかれについて責めてゐても始まらないので、鹿地のやうな男とでも、とにかく共働して、作同解散を実現したい。

——と思つたで、十二月三十一日の夜、訪ねてきた中條に、中央常任委員会入りを通告した。一月に入つてから、中央委員会が二三回か、私の宅で開かれた。ところが、こゝで鹿地は、間もなく解散（五六月頃）しなければならなくなるだらうが、それは向ふからするまでじつとしてゐる方がいゝので、今は分散的活動に転換するんだといふコツプの方針を主張して、どうしても譲らない。私は何時間も鹿地に対抗して自分の説を主張したが、鹿地は頑強に抵抗して動こうとしなかつた。他のものも、もし私に賛成すれば、とんでもない責任が生じてくるのだから、とにかく表面無事な鹿地説を支持した。

二度目、三度目と会合が重なる度に日がたち、分散的形態へ移行するよりも先に、コツプの組織が合法性を失ふ時期が明確に迫つてきた。私はあきずに、情勢の判明に応じて何度も自説をくり返し、一月三十日の会合ではその日の朝刊に（朝日新聞）発表された治維法改正案を出して、もう一べん皆を説得してみようとしてゐて、その会合の一時間前に檢査されたのである。

以上長々と経過や心境を書きつけたが、私はこれらの経過により、留置場内で結局次ぎのやうな一定の考へに到達した。

一、こゝ数年間に、クーデターか、平和的漸進的手段でか、日本

の資本主義支配は軍部を中心とするファシスト的、国家社会主義的政治形態にうつる。イタリー、ドイツに近い状態となる。

二、その時、プロレタリア作家の団体はおろか個別的、合法的存在すら不可能となる。その時は自由主義的進歩的傾向の作家及び作品が、辛うじて合法的存在を維持するだけだらう。

三、私は作家としてどこまでも合法圏内にくひ下つて行かねばならぬ。そのためには自分の作家的位置を「二」の区域にまで今から退却させておく必要がある。

四、勿論今すぐ百パーセントの単なる進歩的傾向の作品しかかゝぬ作家へ転機するといふのではない。合法的な範圍のプロレタリア小説を書くことに、なるべく長くつとめて努力しなければならぬ。しかし、自分は今すぐプロレタリア文学運動から脱し、プロレタリア文学理論による創作や主張から離れるといふことを大膽に社会的に声明しなければならぬ。かくして軍部的ファシスト的國家の中で十年、二十年の活動に耐える合法的地盤を今すぐ作るべくとりかゝらねばならぬ。

五、政治的には、党支持者としての従来公に知られてゐる立場を公然ととり消すこと。そして将来の自分の政治的立場は単に現在の政府の進歩的政策を支持し、その反対の政策を排撃するといふ個人的立場に止まること。（主として外交政策の問題に關連す。北鉄譲受、

不侵條約締結、軍縮、非戦等々、暗々裡にはソウエート外交政策の日本国内における支持者の立場。）

六、場合によつては党の批判を公にする。ことにシンパとしての自分の経験及び作家としての自分か党の影響下にゐなくとも今後の事に耐えるといふ立場において。これは必ずしも実行しなくてもいいが、実行したからとて、反動的なやり方ではない。

七、今後の自分の文学上の立場を新写真主義と名づけて、社会主義的リアリズムと區別して行く。

大体以上を結論的にまとめるのに、私は留置場とて二日、三日をすごした。考へがまとまつてからも急に口外したくなくて、一週間程、私は留置場の中で憂鬱に閉ざされて、殆ど口をきかずにゐた。

この考へに到達したことが憂鬱だつたのではない。それはむしろ、身内に勇氣をおぼえる位で、この結論の内の将来に關する部分は、明らかに私の積極的な亢奮をさそつた。人は亢奮すれば沈黙するものである。それは自分の仕事の上の大きな転換をだれよりも先きに警察官吏に話さねばならぬといふこと、又それを條件として釈放を求めるといふこと、引きつゞいて裁判所の法廷においても同様の措置をとらねばならぬといふこと——これがひどく私を憂鬱の中にとちこめた。おまけに、私の転換は今すぐでは少し時期が早いのである。私の転換が明かになれば友人やその他が色々といふだらう。そ

れに對して、私のしたことが単に臆病のためではなく（臆病はほんの三分だ）十年も二十年も先きのための、つまりは一生をなげこんだ仕事のための大がかりな準備であるとは公言できず、かれらの淺墓な非難にたゞ沈黙してゐなければならぬといふこと。それは何でもないことのやうであつて、その実、人間はどんなけちな相手からでも誤解されることは苦しいことだといふことを私に味はせるのである。私はこのやうな転換を一月の中旬にやうやく腹の中に決心したのだつた。その時はこゝまでまとまらず、決心のし振りは、単に懲役に行くのをやめ、執行猶予にならうといふのであつた。そのために、どこまで自分が退却し、どれだけのことについて、「我、かれを知らず」といはねばならぬかは、ほど見當がついてゐた。たゞその時自分のなすべき文学上の仕事に對する明確な判断、見通しがまだ立つてゐなかつた。留置場の中では、今後は逆にその仕事のプログラムを組立てることから、他の進退の措置へと考へ及ぼして行つて、一定の段階に達したのだ。

私が一月の中旬に、刑務所行きをやめる——流行語のいわゆる「転向」を決意した時から、この時までの行動や判断には、こゝへのべたやうな一聯の現実の種々相が細かく反映してゐるわけである。

私は自分の進退を、自分の性格や能力相應に決した点ではちつとも間違つてゐないと自信してゐる。で、留置場で十日ほどたつたこ

ろ、二三日目毎に面会にきてゐる妻に、私は大体私自身の今後の仕事のやり方と、転換の決心とを話した。そしてかの女の意向をきいてみた。勿論かの女に私以上の名判断がある筈もなし、又しひて私の考へに反対するやうな女でもないことは、私自身がよく知つてゐる。しかし、私は自分の決心はやはりだれよりも先きに、妻に話しかの女をまつさきに納得をさせてからでなければ、他へ話す気にはなれなかつた。

尤も話をするにしても、特高主任の傍でその監視つきの中での話すわけである。敏感でかしこいこの特高主任は、私の話をすつきりきいてしまつた。

私の妻は「あなた自身の考へをいつてこらん」と私にいはれて「そうしたらええわ。」と答へ「その方がええ。」とあとからいつた。あとの言葉は自分や子供のこゝと、大阪で心配してゐる母のことを考へていつたことである。

妻がかへつたあとで、特高主任は、あんなよけいなことを話して奥さんに心配かけない方がいゝぢやないかといふ意味のことをいつた。私はそうぢやないのだ、といつて、夫の一身上の一番重要な問題はまつ妻に話すのが人倫の大本だと逆に少しばかり説教してやつた。それにあの話は妻を一時も早く安心させるためだといひそえた。

「ぢや奥さんは今まで何もしらなかつたのかい？」

と主任は不審そうにきいた。

「まだ話してなかつた。」

と私は答へた。

この時に、普通の人間としてはごくまじめなタチのこの特高主任は、私といふ人間に対してかれの頭の働き方にはまつたく律儀な考へ方の上で、一定の見方をもつやうなになつた。その証拠に、その日からかれは私に対してぞんざいな口をきかなくなり、態度がひどく丁寧になつた。勿論、私が「転向」したことを喜んでゐる警察官吏根性もそこに加はつてゐるのはいふ迄もない。

その翌日だつたか、かれは私をよび出して、きのふ奥さんにいつてゐた趣旨をもう一度よく話してみる——と切り出した。私は右にかいたやうな結論をのべ、尚補足的にコツプの解体運動に骨を折つてゐるが、檢査されたために折角のことがおじやんになつたといつた。

するとかれは意外な表情をして、こゝへ来るか鈴木さん（警視庁の文化団体係）の所へ行って、自分のしてゐることをよく話しておけば、引つぱりはしなかつたのに——と残念そうにいつた。

これはいけないと思つたので、自分は自分たち仲間のために自発的解散を主張してゐたので、その結果が、たとえそつちにとつて都合のいゝことであらうと、事前に申し出ておいてやることは絶対に

できないのだと答えたところ、そんなことはないではないか、とか、へんな見栄を捨てなければとかいふので、自分はきつぱりと、「そんなことをすれば、スパイである！」と大きな声でいつたので、相手はもう黙つてしまつた。それから一兩日して、たしか検挙されて二週間だつたかに、よび出されて「手記」を書くことをいひつづられた。これは一寸意外に思つた。警察が手記を書かせるのは、調べが終つてからにきまつてゐる。私はこゝの主任からちつと座談的に、きかれたゞけて、去年一年間にしたさま／＼なことを調べるのには、本庁から警部鈴木がくる筈だつた。その鈴木がこないで、いきなり手記をかゝせるのである。私はしつこく訊ねてみたが、鈴木と打合せてさうしてゐるらしかつた。又そうでなければ、ここだけが独断でそんな風にする筈はない。それでわかつてきたのは、向ふではあえて深く調べようとはしないのだ。目的は予期の通り「転向強要」にあるらしい。しかし私にすればこゝへきて強要されずとも、社会的に四方八方から、方向転換——退却——を余儀なくされてしまつてゐる。

警察の手記を書くのも、原則的にいへば、書かない方がいゝのはわかり切つてゐる。しかし私の今後の合法的の基礎をかたくしてそこでせめてもの、できる範囲のいゝ仕事をするためには、今手記を書き、その中へ掛値のないきり／＼の退却の区域を、明瞭に文章化

しておく必要があるのだ。どうせ、情勢はますます悪化して、今日何でもなかつたことが、明日もはや禁遏されるといふ例がきつととび出すに相違ないのだ。その時、御都合通りにいくらでも押しこまれ、退かされるやうな場合、一応も二応も抗争するその根拠となるもの、先方でもハツキリ認め、それを條件にして合法性をよこしたところの、不侵條約の手記を書いておく必要がある。その外、小林多喜二との会見、すでにバレてゐる筈の金属の関係、赤旗購読の範圍等は、こゝで深く「清算」さへすれば、合法性をうることになり、創作等に書いても差支ないことになる。それらはなるべく手記に書いておかなければならぬ。退却し、妥協し、合法的な範圍の仕事の自由をうるための「手記」だ。

私はその意味で考へ／＼その日から手記の執筆を始めた。——それは完了までに約二週間かゝつた。私が毎日特高室へ出て手記を書いてゐる間、留置場の中では一斉ハンストの計画が持ち上り、これが大変な騒ぎになつた。一方私自身の家庭ではどうにもならない事件、大阪にゐる母の死が迫つてきた。そのため妻と相談の上、母が意識がなくなつてしまはない内に、かの女だけ十日くらゐの予定で大阪へ行つてくるといふことにした。

私の「転向」の消極的な原因の一つはこの母の死だつた。私は自分が入獄中、家族を母にあづけておく積りでゐた。それは十二月に

大阪で母にあひ、その外に方法がないことを話してよくたのみ、母も快くそれを引きうけてくれてゐたのである。

ところが、その時母の顔色がどうもひどく悪く何となく影がうすかった。母は私たちが大阪を出発する時、梅田駅へ送ってきてくれ汽車が動き出しても、長くプラットの上に立ってこちらを眺めてゐた。

それから母はその足で帝塚山のよしちゃん夫婦の家へ赴き、まもなく発病してたふれ、胃癌だと診断され、その死期は三月いっぱいだとの宣告をうけてしまつたのである。母がゐなくなつてしまひ、生活資料と生活能力のない妻と子を托するに所がなくなつてしまふことを考へると私ははたと当惑した。このことが、もし私が入獄すれば、私自身には今まで予想しなかつたかなり大きな犠牲だと考へられた。それでも——恐らく私は出てきてプロレタリア文学がやれる世の中であつたならば、何とかしたであらう。そうでないことが、母の死——家族の困惑といふ事情にかなり作用して私の氣持を抑へた。妻は二月下旬から三月上旬の間、十日ばかり、共治と女中を平井君の家へあづけておいて、大阪へ行つた。——かの女は私がまだ手記を書いてゐるところへ、帰つてきた。かの女は大阪へ行つて妹に切つてもらつたといつて、断髪にしまつてゐた。毎朝髪を結ぶのが、病氣の妻にはかなり荷厄介なことで、断髪にしたかつたら

しいのを、そうすればおでこがとび出していやらしいといふことと、頭がうすくなつて、年よりもずつとふけてゐる私と、年よりもずつと若くみえる妻との年齢の差が一層著しいやうにみえて、私にいゝ氣持がしなかつたのとで、今までとめてゐたのだが、今は勝手に剪つてしまつたのだ。しかし、私は別に腹は立たなかつた。剪つてみるとそんなに恰好が悪くはなかつたのと、何となくかの女の体の弱つてゐるのが目につくのとで、むしろ、私は髪を剪つてきた妻からいゝことをしたやうな印象をうけた。かの女は母の病状を語り、母が自分の死をさとつて、自分の持つてゐる株券とか貯金とかの大部分をかの女と共治とにゆずるといつてゐることなどを私に伝へた。私はそれをきいて、いつも何の意見もなく黙つてゐる母の一つの性格をみたやうに思った。何だか私自身が自分のことや仕事のことだけをあまり中心に考へすぎてこれまで妻や子供に対する親の愛憎といふものを欠いてゐたやうな苛責の念にうたれた。

とにかく、私は一日も早く手記を書き上げてしまひそれによつて先方の「取調べ」をすましてこゝを出、母の死に目に間にあふやうに大阪へ出かけたといふ、少しそのことであせり氣味になつた。

それから二日目に私は手記を終つた。それはまだ下書の艸稿なので、それを警視庁の鈴木の所へ送り、かれが「満足」したら、私に「釈放」されるといふ順序なのである。

草稿を、特高主任に渡して五日目かに妻が面会にきたため、留置場から特高室へ出てきた際、私は鈴木警部が自分の手記に対して何といったか？ときいてみた。すると、特高主任は俄に不機嫌な顔をして「いゝかげんなものは見る必要がないといふので、まだ送らずおいてある。」との返事である。「ちや僕の手記のどこがいゝかげんなのか？」ときくと相手は黙つてゐるのである。私は前後の様子から、こゝの特高主任が、私の手記ができ上つたといふことを鈴木に報告したら、向ふでは「そちらで十分責任が持てるなら送つてよこせ」といつたため、もし「十分なもの」でなかつたら、困るので忽ち小さな役人根性に返りチギしてまだ送らずにゐるらしいことがわかつたので、何とかして、それを警視庁へ送らせるやうにししようと思ひ、少し態度を改めて至極真剣な少し憤慨した調子になり「自分の手記をあやぶんでとめおいとくといふのは、世界の何大強國の一つたる日本帝國を代表する警察らしくもないケチなやり方ぢやないか。もし僕が手記の内容をゴマ化して君の顔をつぶせば、君はどんな風にも僕をいぢめることのできる警察でないのか。男らしくやり給へ。」

これで効果は百パーセントだった。草間といふこゝの主任は、倍月の小さな大名の家老の家筋でかれ自身はキリストの篤信家を標榜

し、几帳面で小心で、しかし、此の種の官吏の中では「人格」的な男だった。私の言葉がかれのこの「人格」にびんとひびき、又警察官吏としての「自尊心」にひびいたらしく「ちや、君はまさか三文官吏たるおれの顔をつぶしはしないね。」と念をおして、机の曳出しから分厚い私の手記草稿をとり出し、「紳士協約を結ぶね。それなら今からすぐ送るよ」と、かれは私と私の妻とのみてる前で、それを本庁へ送るやうにと下僚にいひつけた。

それから一週間ほど、私はずっと留置場に座つてゐて、あまり外へ出る折はなかつた。ある日の夕暮、妻が面会にきたにしてはへんに遅い時刻だと思ひつゝ、よび出されて出て行つてみると、もう電燈がついてゐるのに、草間特高主任は、私の手記草稿を手にして、ご機嫌なためならず「おい、及第したよ、これでゐゝから、早速清書をして出してくれ給へ、出来次第君を帰すからね、出すときまつたら、少しでも早く清書をすますやうにして上げないと、気の毒だと思つたのでよび出したんだ。」といふのである。かれは自分の顔が立つたのである。それにしても、私は奇異な思ひにうたれた。二月月近く拘留されて（形式は検束の連続）一度も、何も「調べ」られることなく、「手記」を書いて、放たれるといふのだ。しかし、それは形式上の警察の習慣に反するから奇異に感ずるだけで、鈴木警部といふ特高の官吏はなか／＼やり手だといふことになるのかも

しれない。

私は「清書」に二日か三日かかを要した。しかしそれが出来ると、今度は解散後の「プロレタリア文学」といふ論文を一つ書いて出せ。と鈴木からいつてきたといふので、又一日それをかゝせられた。それがすむと、検事局で釈放しろといはないといつて、急にかへそうとしないのである。特高主任は私との紳士協約の手前、それでは悪いといふことを知ってゐるらしく、私のみてゐる前でも、電話で本庁の鈴木と盛に、私の釈放を交渉してゐるのである。どうしたのか鈴木は検事局の意向云々をどこまでも楯にとり、ではどうしたらいいのかと草間がきくと、結局私が自分の政治的、文学的転向退却をどこかの有力な新聞か雑誌かに発表するのをみとどけた上、私を釈放する方がいゝ——それが検事の意見だといふのである。

私は面会に来た妻にいひつけて、弁護士同道で検事局へ交渉にやうした。すると鈴木は嘘がバレた。検事局では私が検挙されてゐることすら知らないといふ。弁護士は妻をつれ、警視庁へ行つて鈴木に面会してそのことをいふと、鈴木は大いに周章して大へん曖昧な返事はかりしたが、とにかく、新聞に発表するやうな原稿は、自宅でなければ書けないのだから（警察に検挙されてゐるものに、そこで商品原稿を書く自由を与へていゝといふことは先方の規律に反することだといふ意味で）すぐにも釈放してくれなければ、お望み通り

はからふことができない。かつ大阪の母が危篤なのだから釈放され次第すぐにそこへかけつけなければならぬ状態だから——といふことを弁護士もいひ自分もいったと妻がやってきて話すのである。

勿論それは傍にゐる主任もきいてゐる。

「とにかく小ぎたなくチビ／＼いちめをしなくてももつと気を大きく持ったらどうかと鈴木氏に伝言してもらひたいな」

と私は主任にいった。

「いや、警部級の偉い人達でも、みんなそんなもんなのだ。しかし何とか骨折る。」

と主任は不愉快さうにいった。

それが、きのふのことであつた。けふ午前十一時ころ私は特高室へよび出された。そこには主任だけゐるで、何事かに亢奮しており、「君、おれがひきうけるから、すくにかへれよ。」といふのである。

その調子が何だか変なので「一体どうしたんですか」ときいた。主任はしばらく「上司といふものは、もつと見識があつていゝ」とか「そんな不謹慎なことで、どうなる」とかブツブツいつてゐるが、「何とかラチをあけて上げようと思つて今朝又電話をかけたら、おれはしらん、そんなにしたいなら、検事局へ直接かけ合へつていふ返事さ。人間一人二た月もひびつておいてそんな無責任なやり方があるもんか……おれアすぐムカツ腹で、検事局へ電話をかけ、係

りの警部の鈴木さんはおれはしらんといふのですが、内容はこれ／＼で、母親が死にかけてゐたりして事情は気の毒だし、私の方としてはこれ以上身柄を預つとく必要はないやうに思ふんですが、御意見はいかゞでせう？ つてきいたら、鈴木氏からはまだ何もきてゐないが、手記は廻つてきてゐる、但まだよんでない。しかし、そんなやうなら返した方がいゝと思ひますね、との返事なのさ。——
検事局は返せといふが、どうするかつて今本庁へ電話をかけたたら、どうも君は少し骨を折りすぎる。ちや君にまかすから、いゝやうにしたまへつていふ返事さ。ああ！ だから、いゝからかへりたまへ君！

と主任はまだ亢奮してかれらの内幕をさらけ出してしやべるのである。私は午後にごゝへやつてくる妻と行違ひにならんやうに、それまで手記の要所のうつしをとる仕事をするからといつて、逆にこの主任をなだめ乍ら夕方まで、うつしをとるのにかゝつた。その間に妻はやつてきた。夕方にかへるから、湯をわかつておいてくれるやうにといつて、妻のかへつたあと、私はうつしをとるのに馬力をつけ、灯がつくころにやつと終つた。

それから、かえる前に、この十日ほど前から又更めて検査されてきてゐる鹿地亘をよび出してきてもらひ、一時間ほど、作家同盟解散の顛末（私が二月ごゝにゐる間に、鹿地は党に向つて解散説を

とほし、三月上旬に同盟を解散し、その声明書をかれが執筆したといふのであるが、その際党といろ／＼交渉し、書いたものも手渡ししたので——それが二月末／＼の再登録の履歴書だつた——もしそれが向ふの手に入つてゐれば萬事休すなのだが、その時は、自分は最後の覚悟をきめてゐるとかはいってゐた。最後の覚悟とは転向の声明のことらしかつた。）やら、今後の仕事のやり方やらについて話しあつて、予定より少しおそくなつて家へかへつてきた。

二月月逢はない子供が、ねてしまはない間にかへらうと思つたが、鹿地と話したゝめにおくれ、あはててかけつけるやうに、吉祥寺駅を下りて、家の玄関までかへり、ドアをあけると、共治は丁度メシを食つてゐたのが、ママや女中に椅子からかゝえ下ろされて、玄関にとび出してきた。

「パパよ、パパよ」
と妻や女中がわい／＼ハタからいつたので、かれはびつくりして目を丸くし、忘れてはゐないらしかつたが、恥かしいのと、まだ見定めがつかぬのとで、赤い顔をして、みつめてゐたが、私が上へあがつてオーバをぬいた時に、私の顔をみて笑ひ出した。やつと見当がついたのである。しかし、手を出してやつても、よつてはこなかつた。

「こんなに髪がのびてゐるぢやないか、まるで病氣の子供みたいに

みえる。」

と私は子供の頭をなでて、妻にいった。子供はそんなに前と変らなかつたが、二た月の間に顔が一段と大人びてゐる。私は湯にはいつて飯をくひ、留守中の手紙の類をさっと眼をとほして、「今帰宅した」といふことを知らせる大阪への手紙を二三通書いた。それを書いてゐると疲れてきたので、眠ることにした。

(未完)

《附記》

この稿は、平成十二年度学部共同研究の一部である。規定に基づき銘記する。

(うらにし かずひこ／本学教授)